

## 編 集 後 記

日本国内における医師の数は2005年のデータでは、約29万人と言われている。この数値は、人口千人あたりでみると、OECD加盟国の平均以下であり、しかも日本の場合、就業の実態を問うことなく医師免許所有者すべてを医師数に含めていることから、実働は21万3,000人にすぎないとのことである。各メディアは小児科医や産婦人科医不足をセンセーショナルに報道することが多いが、実は、医師数が最も減少しているのは、小児科や産婦人科医ではなく、外科医であることを、中尾昭公名古屋大学教授は、具体的な統計資料を基に明らかにされている。

では、なぜ外科医が減少しているのだろうか。日本外科学会理事長の里見進東北大学教授は、外科医の労働時間は長く、医療事故や提訴のリスク、労働に見合う対価が得られないことが、外科医志望者の減少につながっていると、外科医をとりまく労働環境の過酷さが学生の外科志望を妨げていると指摘された。現代の若者の価値観が、我々が医学生頃のものに比べ、大きく変貌していることも、外科医不足の一要因ではあると思うが、若い外科医の労働環境が年々厳しくなっていることも明白な事実である。

今月号には22編の論文が掲載されているが、そのうち8編は大学から、14編は一般病院からの投稿論文である。いずれの論文も、いかに著者が激務の中、日々の臨床の一例一例を大事にしつつ、懸命に外科医療に取り組んでいるかが目に浮かぶものばかりである。著者、および指導にあたられた上級医の方々に心より敬意を表したい。本誌にも毎月多くの論文が投稿されてくるようになった。本来ならば、著者たちの日々の努力を開花させるべく、すべての論文を掲載したいのではあるが、雑誌のスペースが限られており、編集委員会が苦渋の選択を常に迫られていることをご理解いただきたい。

若い外科医の職場環境や対人関係、キャリアパスなどに関する不安を取り除くのみならず、彼らのモチベーションを上げ、そしてそれを高いレベルで維持していく、これが我々指導医に課された役割である。外科医療の崩壊を防ぐためには、指導的立場にある外科医が価値観を共有し、一致団結して前進する以外にないのではないかと、思う今日この頃である。

(楠 正人)